



Title	「空-The Sky-」
Author(s)	土田, 映子
Description	第24回らいらっく文学賞佳作入選作
Citation	朝日新聞
Issue Date	2003-09-23
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/14632">https://hdl.handle.net/2115/14632</a>
Type	other
File Information	asahi2003-9-23.pdf



その日の朝は航空機のパイロットたちの言う「極晴天」[severe clear]で始まった。見かけ上の視程距離が無限であるという意味だ。……夏の終わりの一日、楽しむべき恵みの日であった。

—The New Yorker誌、二〇〇一年九月二十四日号

子どもの頃、日常と一緒に過ごしているクラスメイトや教師や親たちと、地続きだと思っていた自分の世界が突然に他の人たちのそれから引きはがされて、自分の足元だけが海原に漂い出てしまうような感覚に襲われたことが幾度もあった。たとえば小学校の図画の時間、クラス全員が校庭で絵を描いていたはずなのに、ふと顔を上げると自分ひとりが日の照りつけるアスファルトの上に座り込んでいたり、親たちが家の書棚には文学書をいっぱいに並べていたのに、娘が詩の本に耽溺しているのを見つけるといい顔をしなかった時などだった。

そうした、日々の暮らしの中でふいに虚空を破って目の前にぬっと突き出される違和感、したたか顔を打ちつけて初めてその存在がわかるガラスの囲いのような距離感を作り出すものの中に、「国」とか「文化」とかいう言葉が初めて入り込んできた日のことを、わたしは鮮明に憶えている。十二歳だった。

当時、わたしの家族は父の仕事の関係で、アメリカ合衆国のシアトルに隣接したベッドタウンの一つに暮らしていた。中産階級の、圧倒的に白人の住民の中にぼつぼつとアジア系の住人が混じる、つつましやかだが豊かな郊外<sup>サスレ</sup>の住宅地だった。東京から引越して丸三年を過ごし、現地の中学校の一年生になって、ようやく授業についていけるほどに英語が上達した頃のことだった。

歴史の授業で、第二次世界大戦の学習用映画が教室で上映された。モノクロのニュース映像を編集してナレーションをつけたものだったが、取り上げられるトピックは馴染みのないものばかりだった。日本語の本を通して知っていたのは東京大空襲や沖繩戦の悲惨や戦中戦後の食糧難、原爆の被害といったもので、その日の映画で延々と取り上げられたDayなど聞いたこともなかったし（ずっと後になって、連合軍のノルマンディー上陸のことと知るのだが）、これもまた延々と映し出されたドイツの強制収容所の惨状や焼却炉に転がる死体の画像も、そういう場所があったという本の一行程程度の知識しかなかった自分には未知の、身のすくむ異界の光景だった。

ナレーターがドイツの降伏を告げて言った。

「だが、まだ抵抗を続ける国が一つ残っていた……日本である」

ほどなく、写真で見覚えのある原爆のきのこ雲が画面の中に湧き上がった。続いて焦土の画像、人間の存在のしるしの一つもない白と黒と灰色の凹凸の広がり、ナレーターの解説が被さった。——原爆によってどれだけの数の命が失われたのか正確には誰も知らない、しかし、——

「原爆は戦争を終わらせることで、はるかに多くの命を救ったのである」

照明を消した教室の中で、スクリーンの光の反射が自分の顔に、白人のクラスメートたちの横顔に、机の角に、青い氷のように注いでいた。息をするのが苦しかった。

映画が終わって教室の明かりがつき、先生が授業の終了を告げると、わたしは一目散に教室を出た。小学校時代から仲の良かったアメリカ人の友人が追いつがってきた。

「ねえ、あのナレーター大きだったよね、『ジャパーン!』だったさ」

わたしは唇を結んで歩き続けた。

「ちよつと、あなたって映画の最後の方で泣いてたよね」

「そんなことない」

「え、絶対泣いてたって——」

「泣いてなんかいないったら!」

友人は口をつぐんだ。わたしは彼女と目を合わすこともせず、校舎の玄関へ向かって早足に歩き去った。友人の無邪気な口ぶりが腹立たしく、他方で自分の中に生じた反発の激しさに混乱していた。気づかぬうちに自分の内に培われていたもの、アメリカ人のクラスメートたちは持っていない何物かが意識の下に育っていることを、その時初めて感じたのだった。

父の北海道への赴任が決まり、わたしたちの家族が帰国したのは、それから間もなくのことだった。

二月のシカゴの夕空はそそり立つ高層ビルに切り取られ、いつそう高く乾いて見えた。この街の空は曇っていても日本のように重く垂れ込めたさまにはならない。アメリカ中西部随一の都市、かつては大平原プレーリーの女王と呼ばれたシカゴの上に広がる空は、どんな天候の時でも奥行き遙かに広がっている。晴れた昼間に大学のキャンパスを行けば、日の光はまるで水のようにくまなく芝生やりんご並木の枝や石畳の上に注ぎ、わたしはいつも溺れる

ことのない光の海に浸っているような心持ちになるのだった。けれどもこの日、月が改まれば別れを告げなくてはならないシカゴの空は、白く街明かりを反射する雲の向こうにあった。

今夜は、ルイスと会う約束があった。

少女時代にアメリカを去って十数年が過ぎ、わたしは駆け出しのアメリカ研究者になっていた。四月から札幌の大学のポストに就くことが決まり、あわただしく留学生活の後始末をする合間に時間を見つけては、当分会えなくなる友人たちと過ごしていた。

ルイスは他の友人たちとは少し違う存在だった。彼は二回りも年上のジャーナリストで、大学で行われたイベントのためにキャンパスを訪れていた際に知り合った。わたしにとつては、大学と関係のない唯一のシカゴ人の友達だった。

この数ヶ月間、気になっていたことがあった。ルイスには過去の戦争に関する著作や記事がいくつかあるのをわたしは知っていたが、前年九月十一日のいわゆる同時多発テロ事件とそれに続くアフガニスタンでの戦争については、意見らしいものを書いていなかった。大学の図書室で新聞を広げ、彼の担当記事を見ても、そこに現れる話題はかつての戦争に参加した老兵のインタビューやら往時の生活の不便やら情報統制やら、つまりは関連があっても迂遠な印象の話ばかりだった。

ルイスは待ち合わせ場所の新聞社の玄関に、先に来て待っていた。以前に会った時のように、少し時代遅れの形のジーンズにジャケットを引っかけ、ポケットに両手を突っ込んでいた。

近くのレストランに入って注文を済ませると、わたしはアルバムに入れた写真をルイスに広げて見せた。

「ニューヨークへ旅行に行った時の写真なんです」

並んだ二枚の写真のうち、一枚には煙を吐く高層ビル、もう一枚には水色の空に立ち昇る煙の柱が写っている。それぞれの左隅にはオレンジ色でくっきりと、「0191」の刻印がある。

「これは——」

ルイスは写真に見入り、それから、

「手が震えなかったの？」

と尋ねた。

「ええ。」

「この写真を撮った時さ。シャッターを押す手が震えなかった？ 心臓がどきどきしてたんじゃない？」

畳みかけられて、わたしは困惑した。予想もしていなかった質問だった。

「いえ——そんなことはなかったですね。とても冷静でしたよ」

「そうだね。確かに。全然ぶれていないものね」

彼は改めて、二枚の写真を見比べた。

「しかし、これはすごい偶然だよ。窓とビルとの間に何の障害物もない」

「六階にいましたから」

「そんなの、ニューヨークでは大した高さじゃないじゃないか」

「考えたこともなかったですよ」

わたしは笑い出した。

「あなたって人は——苾からジャーナリストなんですね」

「何だと思っていたのさ」

それにしても、すごいことだ、と彼は繰り返し、飽かず二枚の写真を見つめ続けた。

ルイスが写真を欲しいというので（それ以前にも、何人もの知人に求められて焼き増しを渡していたが）、アルバムの写真を抜いて彼に渡した。ルイスはどこであの日の事件を知ったのか、何をしていたのか、直後にどんなことを考えたのか——訊きたいことがたくさんあった。けれども、彼はわたしの新しい仕事に話題を転じてしまった。話の流れを遮ってそうした質問をすることはばかられた。彼の話したいことではなさそうだという感じもあった。札幌という街について、その大学の歴史について、またそれらのアメリカとの深い関係について彼に語りながら、わたしは自分の疑問を呑み込んでいた。

あの日、ニューヨークにいたのは本当に稀な偶然だった。これまでの人生を通して、ニューヨーク・シティに滞在したことは二度しかない。一度目は小学六年生の冬休み、家族旅行で訪れた折で、断片的な記憶があるだけだ。そして二度目が、あの九月だった。

一九九九年の春に最初のシカゴ留学から帰国すると、いろんな人に、ニューヨークへは行ったかと尋ねられた。行かなかったと答えると、なぜ行かなかったのか、もつたいないと言われた。そんなふうに言われるのはニューヨークだけで、たとえばロスアンジェルスだって誰も「行ったか」とは訊かなかった。観光のためだけに旅行に出かけることはめつたにしないからだ。二年後、資金ができたので中断していた留学の続きに向かったとき、

ニューヨークを訪ねることがアメリカでやるべきことのリストに入っていたのは、それほど皆が言うなら、見ておかなければならない街なのかも知れないという思いがあったからだった。

その、たった一度の自分の意思による訪問の間に、ニューヨークの空は崩れ落ちた。

\*\*\*\*\*

九月十一日火曜日の朝、目を覚ますと八時だった。わたしはグリニッチ・ヴィレッジの十一番ストリート、ラーチモント・ホテルの最上階に泊まっていた。小ぎれいなホテルだが部屋は信じ難い小ささで、よくもこれだけのものをと感嘆するほど、家具やテレビや洗面台などを詰め込めるだけ詰め込んであった。必要なものは全部揃っていたけれど、ベッドの周りには歩くのがやつとのスペースしかなかった。

幅の狭い窓の前に立ってブラインドを開けると、青く晴れた空を背景に、世界貿易センターのツイン・タワーがすっと立っていた。三泊もしながら、窓からまっすぐそのビルが見えるのに気づいたのはその時が初めてだった。部屋の狭さにスケジュールの忙しさも手伝って、それまでブラインドを開けてみることをさえていなかったのだった。

きれいだなあ、としばらく眺めていた。ビルの肌の白さが青空によく映え、競合する高さの建物が周囲にないためにその姿はいつそう水際立って見えた。シカゴを出発する前に作った、少々無理の目立つスケジュールによれば、旅行最終日のこの日は朝の八時からショッピング、続いてアメリカ自然史博物館のプラネタリウムを観て、午後二時台の飛行機でラ・ガーディア空港を発つことになっていた。有名な安売りデパートがあつて、七時四十五分から開店するその店は、世界貿易センタービルの向かいなのだった。けれども、その予定は反故にすることを昨日のうちに決めてしまったので、この旅行中で初めてのゆつたりとした気分の朝だった。短いニューヨーク滞在の期間にくまなく観光予定を組み込んで、前日は夜の十時まで出歩いていた。楽しみが苦行になる前に踏みとどまることにしたのだった。

プラネタリウムを観る予定は残してあつた。近年、天文趣味の雑誌に記事を寄稿する機会に恵まれ、プラネタリウムや天文教育の情報に興味を持つようになっていた。ニューヨークのこのプラネタリウムは全米でも最も有名なものの一つで、ここまで来て観ずに帰るわけにはいかない。博物館の他の展示はあきらめてプラネタリウムだけに絞れば、充分飛

行機には間に合うだろうと考えた。

身支度を終えて地下一階のダイニングルームに下りた。ごく質素なセルフサービスの食堂である。ペーストリーとジュースを取ってテーブルにつこうとすると、高い位置に据えられた小型テレビの画面に、さつき窓から眺めたビルが映っていた。違うのは、ツイン・タワーの一方から煙が流れていることだった。テレビ画面のテロップに目をこらすと、

「世界貿易センタービルに飛行機が衝突」とあるのが読み取れた。

事故だろうか――。

テレビが見やすい位置に席を取った。カメラはビルのほぼ全体が見える距離から捉えた映像を流していた。朝食をとっている間に、もう一方のビルからオレンジ色の火の玉がぼつと噴き出し、しばむのが見えた。もう一機衝突しました、とアナウンサーの声が聞こえた。

(わざとやってるんだ！)

ひらめくものがあつた。気がつくとき、食堂内の宿泊客が皆テレビの前に集まって来ていた。若者が中心の七、八人の宿泊客たちは、腕組みをして押し黙ったまま画面を見つめていた。食堂のおばさんがカウンターの後ろから身を乗り出していた。

二棟のビルは煙を上げている。これは、もう今日は飛行機は飛ぶまい、と思った。テレビのアナウンスも、全米の空港で離陸が差し止められたことを告げていた。

見ている間に、テレビ画面の中で片方のタワーが崩れ落ちた。静かだった宿泊客の群れが、一斉に息を呑んだ。

もう朝食は喉を通らなかつた。半分残したペーストリーと食器を片付けて、フロントのある一階へ上がった。イスラム過激派の仕業だろうかと考えた。わたしがすぐに思いつく反米勢力といえは、それくらいだった。

八畳間ほどしかない小さなロビーとの間をガラスで仕切ったフロントの前に立って、延泊したいのだけれどと訊いてみたが、満室との答えだった。では、とにかくチェックアウト時刻の十二時ぎりぎりまでホテルにしようと考えながら六階の部屋に戻った。

十時を回ったところだった。窓枠で四角に切り取られた青空の中、目覚めた時に眺めたタワーの片割れが火山の噴火のような煙を吐いていた。窓とは反対側に置かれたテレビをつける、窓の外のビルがそこでも燃えていた。望遠レンズが火災の起きている階の周辺を拡大して映していた。

持参したカメラにフィルムが残っている。こんな時は、やはり写真を撮るべきだろうか。

気が進まなかったが、義務のようなものを感じてカメラを窓に向け、シャッターを切った。日本は夜更けだ。起きているかどうかわからないが、家族に連絡を入れなければと受話器を取った。ホテルの指示書を読みながらプッシュボタンを押す。しばらく耳を傾けたが、空白が続いただけだった。

手洗いに立って廊下に出ると、隣の部屋のドアが開け放されて、若い白人のカップルがいた。金髪をポニーテールに結った女の子が戸口に立って、

「部屋の電話、つながりました？」  
と訊いてきた。

「かけようとしているんですが、うまく行きません。回線に問題があるのかも知れませんが」

とわたしは答えた。

「そうですか。こちらもなんですよ」

彼女は部屋の中の男性を振り向いて、電話、やっぱり使えないって、と言った。

わたしは部屋に戻ると、コロンビア大学の橋川健竜さんの電話番号を押してみた。橋川さんは東京の大学院の同期で、歴史学の博士論文の完成を間近に控え、足かけ七年にわたる留学の締めくくりに入っていた。わたしが初めてひとりでニューヨークへ行くというので、案内役を買って出してくれ、前の日は朝から晩まで一緒に歩いてくれたのだった。

電話がつながり、彼は家にいた。

「飛行機では帰れなくなっちゃった」

わたしは現況を説明した。

「とにかくシカゴへ帰れる方法を探してみるから、ホテルを出たらペン・ステーションへ行ってみるわ」

「そうだね。ニューヨークを出られるんだったらそうした方がいい——市内への食糧の供給が止まったりすることがあるかも知れない」

と彼は言った。そんな可能性は考えてもみなかった。

「万一、どこにも行くところがなかったら、ぼくのところに泊めるから、連絡して」

橋川さんは他の研究者の男性ふたりとアパートをシェアしていたが、同居人がどんな人たちなのかわたしは知らなかった。

受話器を置いてテレビの方を見ているうち、画面の中のビルが揺らぎ、黒い粉塵を噴き出した。反射的に窓の外を振り向くと、青く澄んだ空の中を、ビルはきらきらと輝く破片

を撒き散らしながら下へ下へと沈んでいった。ガラスでできた砂の城が崩れ落ちていくかのようだった。あとはただ、雲ひとつない空の下に白煙が低く広がるばかりだった。わたしはビルの崩壊を見届けると再びカメラを取り上げ、からっぽになってしまった窓の中の空を、先ほどと同じ位置から写真に撮った。

もう一度東京の番号を押してみた。今回は呼び出し音が聞こえた。

電話に出たのは母だった。

「映子ですけど、起きていた？」

「みんな起きてテレビを見ているわよ」

事件が起こった頃、日本ではちょうどニュース番組の始まる時刻だったのだという。母は拍子抜けするほど普通の口調でしゃべっていた。少なくともわたしにはそう聞こえた。

手短かに無事であることと、現在の状況を伝えた。

「二本目のビルが崩れるのを窓から見ているのよ」

わたしは次に言うべきことを探して迷った。

「怖かったわ——」

だがそう口にした瞬間に、それは違うと思った。ビルが崩れるのを目の当たりにした時、シャッターを切った時、そして今。怖いなどという気持ち、これまでに経験のある種類の恐怖という感覚ではない。では何なのだろう。

「心配した？」

と訊くと、

「心配したけど、パパが『高所恐怖症で低血圧の映子がこんな朝早くからビルの上に行っているはずがない』ですって」

洞察力にすぐれた親を持って幸いである。

橋川さんとのやり取りについてと彼の連絡先とを伝え、実家との電話を終えた。

飛行機が飛ばないとなれば急ぐ必要もなくなったので、共同のシャワールームに入って髪を洗ってからゆっくり荷物をもとめ、ホテルのロビーに下りた。狭いロビーは込み合っていた。事件について何か思っているのか、いないのか、浅黒くどがった顔を不機嫌な表情に固定した若い女性フロント係に部屋の鍵を出して、チェックアウトの手続きを取った。カウンターで財布をしまっていると、太った中年白人女性が横にやって来て、フロント嬢に、

「一部屋お願い」

と言った。

「申し訳ありませんが満室です」

「でも、今この人が（とわたしを指して）チェックアウトしたじゃないの」

「予約で満室なんです」

フロント嬢は無愛想に答えた。一方で、部屋の準備ができましたと従業員に言われてエレベーターに向かう三、四人のグループがあった。あの小さな部屋に何人も泊まるのだから、と彼らのほっとした様子の後ろ姿を見ながら思った。ロビーの公衆電話では別の白人女性が、

「一室だけは確保したんだけどね……」

と、どこかへ向かって報告していた。

十二時を過ぎた。わたしはロビーのソファから立ち上がり、通りに出た。ラーチモン・ホテルは南北に走る五番アヴェニューと、アヴェニュー・オブ・アメリカスという別名のついた六番アヴェニューの間に位置しており、賑やかな六番アヴェニューに出てその日の活動を始めるのが滞在中の日課になっていた。この日は六番アヴェニューを八ブロックほど南へ下ったところにある食堂で昼食にすると前日のうちに決めていたので、取りあえず予定の行動を試みることにした。

アヴェニュー・オブ・アメリカスは混雑していた。前日までと違うのは、道のそここで、車や屑入れを台にしてラジカセが置かれてあり、人々が取り囲んでラジオのニュースに聴き入っていることだった。若い者も壮年の者も、肌の色の白い者も黒い者も、一様に眉間にしわを寄せ、腕組みをして歩道にたたずんでいた。

南へ向かって歩いていくと、反対に南から北へ北へと歩いていく人々の列が目についた。格別に汚れたり傷ついたりしている人は一瞥した限りでは目に入って来なかったが、軍隊の行進でもあるかのように、誰もがわき目もふらず一心に足を運んでいた。

大声で説教らしきものをしている黒人の男性の横を通った。アロハシャツに半ズボンの姿で、激しく身振り手振りを交えながら、神の罰が下ったのだとしゃべり続ける痩せた彼の言葉に、二、三人の黒人の男たちが聴き入っていた。彼らもまた、眉根を寄せて腕組みをしていた。

そばを過ぎる店、過ぎる店、すべての戸口にCLOSEDの看板が下がっていた。

これでは目当ての食堂も閉まっているかも知れない。その上、ふと、こんなことをしてはいけけないのではないかという不安が胸をよぎった。わたしはきびすを返して、六番

アヴェニューを北へと戻り始めた。人を鈴なりに乗せたバスが後ろから前へ通り過ぎていった。乗客が窓枠につかまって立っているさまは、古いフィルムで見た日本の戦争直後の食糧買い出し列車に似ていた。

どう歩こうかとそばに並んだ公衆電話ブースの一つに入り、電話台の上でガイドブックを開いて道を確認していると、背後から甲高いののしり声が聞こえた。振り向くと、髪を耳の下で切り揃え、ニューヨークの女性に多い、肌と一体のようなぴったりのTシャツを着た若い白人の女が目を吊り上げ、腕組みをして立っていた。驚いてブースから退くと、女はさもいらしたふうに電話を挿んでボタンを押し始めた。だが両側を見渡すと、他に複数のブースが空いているのだ。わたしはバックパックを背負い直し、ひどく嫌な気分ですその場を離れた。

目指すペン・ステーションは三十一番と三十三番ストリートの間で、ホテルからは約二キロの位置にあった。三日前、わたしはニューヨーク州北部のオールバニーから乗った列車でこの駅に着いたのだ。その日列車を降りた時から、ニューヨークへの違和感がつきまとったのが思い起こされた。第一に、残暑が酷いものだった。コンクリートの壁や舗装の内に残って冷めない熱が、神経を逆立てるしつこさで夏服に汗を滲ませた。街のどこへ移動しても、路上のごみ袋やバケツから漂う悪臭が空气中に充満していた。唯一臭いに悩まされずに観光ができたのは、マンハッタンの南端からフェリーで渡ったエリス島の移民博物館くらいのものであった。

十九年ぶりのニューヨークを、大学の休暇の最後に訪れるのをわたしは楽しみにしていたはずだった。だが、ニューヨークに着いた瞬間から、シカゴへ帰りたくて仕方がなかった。自分には珍しいことだった。どこの土地へ行っても大抵はすぐに好きなどころ、興味のある面を見つけることができる。でも、この時のニューヨークは違った。ほとんど何も見ないうちから、ここにいるべきではないという感覚が全身の皮膚を緊張させていた。それは本能から湧いてくる感覚のようだった。

北へ向かう地下鉄の駅の入り口から階段を下りると、制服の警備員が改札をふさいでおき、何人かの人々がこちらに向かって歩いて来るところだった。Uターンして地上に顔を出すと、階段をのぞき込むように身をかがめていた白人の男性と目が合った。彼が尋ねた。

「地下鉄、動いていますか？」

「駄目なようですね」

わたしは答え、ペン・ステーションに向かって歩き始めた。歩き出すと神経はただ歩く

ことだけに集中した。一步一步がニューヨーク・シティから自分を遠くへ運んでいくという感覚が、体を強く内から突き動かしていた。

途中、ほとんどの店やレストランが閉まっている中で、開いているダイナーが一軒あったので、そこで昼食を済ますことにした。店内は広くて席数も多かったが、テーブルとテーブルの間は肩が触れ合いそうに狭く、足の踏み場もないほど混んでいた。客のしゃべる声がわんわんと辺りを覆っていた。通りでニュースに聴き入っていた人々や列をなして歩いていた人々の静かさとは対照的に、ダイナーの中の人々は精力的にしゃべりまくっていた。わたしは朝食用のメニューからフレンチトーストを頼んだ。こういう状況下だからこそもつとまともな食事をしておくべきだ、と自分の良識は言っていたが、食べごたえのあるものを受けつけられる気分ではなかった。

ダイナーを出てからさらに北へ歩き、ペン・ステーションにたどり着いたのは午後三時頃のことだった。駅の入り口からどっと人が入っていくところだった。ちょうど列車の運行が再開されたところだ、と誰かが言っていた。入り口の売店でペットボトル入りのミネラルウォーターを一本買って、構内に入った。

構内では大勢の人々が忙しく行き交っていた。多くはビジネススーツに身を包み、一刻も早く家に帰ろうとしている様子だった。その中にひとり、熱に浮かされたような足取りの中年の女性が混じっていた。モスグリーンのスカートスーツを着て肩まで金髪を下ろした女性で、肌色のストッキングの足には靴を履いていなかった。視線を宙に泳がせながら、

—— My sister is dead! —— とひとりごちたのが耳に届いた。

DELAYED (遅れ) の表示が並ぶ時刻表示板を見上げると、夕方にシカゴ行きのアムトラックが出るのがわかった。出発時刻まで待とうと、待合コーナーの椅子に腰を下ろし、駅の中の様子を眺めた。時刻表示板の下には腕組みをしたサラリーマンたちがずらり並び、真剣な面持ちで表示を見守っていた。列車の新しい出発情報が表示されるたびに、その列車をつかまえようとする人たちがホームへ向かって駆け出していくのだ。しかし、日本から持ってきたガイドブックによれば、この光景はニューヨークの駅では日々展開されているものだという。普段とどの程度様子が違っているのか、わたしにはわからなかった。

近距離列車が次々に出ていくと、構内の人ごみも薄くなり始めた。待合コーナーにゆくり座っているのはわたしだけだった。二日続けて長時間歩き回った足が痛むので、靴を脱いで壁にもたせかけていると、

「列車が動くのを待っているのですか？」

と話しかけてくる人があった。

見ると、風船のようにまるまるとした体に焦げ茶のスーツを着込み、平べったいブリーフケースを提げた白人男性がこちらに歩いて来るところだった。あまりに太っているので年齢がよくわからないが、三十代後半か四十代初めというところだろうか。小さい目に不釣り合いなほど大きな焦げ茶のフレームの眼鏡をかけ、広い額の上にくると張りついた髪も濃い茶色だった。

「列車はしばらく前から動いていますよ。自分の乗る列車を待っているんです」

わたしは答えながら、足を壁から下ろした。

「お疲れのようですね」

相手はそばに腰を下ろして、わたしの足に目をやった。彼の英語からは、どこのもともわからない奇妙な訛りが聞き取れた。

「かなり歩き回りましたからね」

「どうです、わたしが足のマッサージュをして差し上げましょうか——」

とその男性は言い出した。

「とんでもない。一日中歩き回って、埃まみれになった足を出せませんよ」

「そんなこと気にしませんよ。そちらの足を貸しなさい。わたしは上手いんですよ」

変な人だなと思いつながらしぶしぶ右足のソックスを脱ぐと、彼はわたしの足をスーツの膝に載せて、足の裏のくぼみを押し始めた。

外国人だろうか？その様子を見ながら、わたしは考えた。出張か何かでニューヨークに来ていて、事件の日に遭遇してしまったのだろうか？

「どちらからいらしたんですか？」

と訊いてみた。彼はわたしの足の指を一本一本伸ばしながら、

「スタテン島ですよ」

と言った。ニューヨーク市の一部である。

突然、彼に足を預けているのがばかばかしく思えて来た。

「そちらの足を出しなさい」

男性はわたしの右足を膝から下ろして言った。

「いえ、やっぱり結構です。足が汚くって恥ずかしいですから」

「構いませんというに」

「結構ですってば」

そうですか、と男性は少しだけ残念そうに立ち上がり、ブリーフケースを提げて立ち去った。

ふと、シカゴ行き列車には乗れるのだろうか、という疑いが心をよぎった。日本の列車の自由席に乗るようなつもりでいたが、予約が要ったのではないか。ガイドブックを確認すると、「長距離列車を除いて予約の必要なし」とあった。立ち上がって公衆電話の方へ移動した。駅に予約の窓口はなく、インターネットか電話のみの受け付けなのだ。アムトラックのツールフリー番号にかけると、女性の予約受付係が出た。当日のシカゴ行き列車について尋ねると、案の定予約でいっぱいだった。

「乗り継ぎでもいいんですけど、他の列車はありませんか？ 明日以降はどうですか」

「すみませんが、シカゴ行きは木曜日まで全部売り切れなんですよ」

予約係の女性は終始親切で、穏やかな話しぶりだった。緊急事態の起こっているさなかで仕事をしているという様子はみじんも感じられなかった。

電話を切り、自分の気のきかなかつたのを悔やんだ。飛行機が飛ばなければ他の交通機関がいっぱいになるのは当たり前である。朝のうちにアムトラックに電話をかけていれば、あるいは席が取れたかもしれない、と思った。

しばし考えた末、意を決して、ラッセル・セージ・カレッジのアンドア・スコットネス教授の自宅の電話番号を押した。スコットネス教授は二〇〇〇年の秋から二〇〇一年の夏にかけて、フルブライト・プログラムによる招聘教授として東京でアメリカ史の授業をしており、二〇〇一年の春までその大学の助手を務めていたわたしは教授と机を並べて仕事をしていた。気さくで庶民的な教授は、学生の間で絶大な人気を博していた。妻のテレサ・ミード教授はラテンアメリカの研究者で、スコットネス教授と同時にフルブライト招聘教授として都内の他の大学で教鞭を取っていた。離日してオールバニー近郊の家に戻ると、スコットネス教授はぜひ遊びに来るようにと誘ってくれた。その言葉に甘え、ニューヨーク市を訪れる前に、シカゴからオールバニーへ飛んで両教授宅に泊まっていたのだ。

電話はすぐにつながった。

「どこからかけてるんだい」

スコットネス教授の声は落ち着いて聞こえた。

「ニューヨークのペン・ステーションです」

「何だって？ きみは昨日、シカゴに帰ったと思っていたんだが。一日間違えて憶えていたんだな。……じゃあ、どうする。動けなくなってしまうんじゃないか」

「そうなんです。それで、お願いをしてもよろしいでしょうか」

「もちろん。どんな手助けができる」

「もう一度、そちらにお邪魔させていただけないでしょうか？」

「どうぞ、喜んで。列車は走っているんだね」

「ええ。オールバニー行きの列車が午後八時に出るそうです。到着時刻がだいぶ遅くなりますが——」

「何時だつて構わないよ、待っているから。オールバニーの駅に着いたら電話しなさい」

丁寧な礼を言つて電話を切つた後、もう一度橋川さんのアパートにかけて、オールバニーに向かう由伝えた。それから人気の少なくなった構内の椅子に座り、八時を待った。

手持ち無沙汰に、二冊のニューヨークガイドブックを延々と読んだ。日本から持参したガイドブックにもアメリカで買ったガイドブックにも、ニューヨークの有名な高層ビルを紹介に多くのページを割いてあつた。今朝崩壊したあの二棟のビル——世界貿易センターのツイン・タワーについて、その名前すら、わたしはこの日のニュースで見るまで知らなかった。ニューヨークのビルといえば、エンパイア・ステート・ビルとクライスラー・ビルしか知らないでここにやつて来たのだった。

昨夜のことだ。橋川さんと一日ニューヨークを歩いた最後に、ブルックリン・ブリッジを徒歩で渡つた。途中でひどい夕立に見舞われて、わたしたちはせまですぐ濡れになった。雨が上がった後、対岸の公園からマンハッタンのスカイラインを眺めた。雨で洗われた空気を通して、高層ビル群の光はひとときわ輝いて見えた。

「昔、エンパイア・ステートに飛行機が突っ込んだことがあつたんだよ」

橋川さんは言った。そういう事件があつたことは、わたしは先にアメリカのガイドブックを読みかじつて知っていた。一九四五年のことだといった。

「大変な事故だったんでしょね」

「小型機の事故で、犠牲者は少なかったし、ビル本体も大丈夫だったんだよ」

なぜそんな話をしたのだろう。今日との符合を思うと、胸にひとすじ氷水が走るような心地がした。

時間が来て、乗り込んだ列車は思ったよりも空いていた。車内アナウンスがあり、これは臨時便で普段この路線に使われるものとは異なる種類の車両を使っているため、通常よ

りも速度が遅く、オールバニー到着は四時間後、十二時と言っていた。普通のスケジュールなら二時間半しかかからない路線なのだ。車内の半分ほどを埋めた、多くがビジネススーツを着た男女の客はみな静かだった。夜の闇を突いて走る列車の中で、朝にホテルの窓から目撃した世界貿易センタービルの崩壊のさまが、ビデオを繰り返し観るように幾度も目の前に現れた。それはほとんど美しいともいえる光景だった。遠く青く澄んだ空に散った、数知れない光のかけら。窓を閉め切っていたからか、距離のせいか、崩壊に伴ったはずの轟音は耳に入らなかった。だが、つけていたテレビの音声も記憶にない。音は届かなかったのか、それとも――。

夜更けのオールバニー＝レンセレーア駅に列車が滑り込むと、乗客たちは三々五々、真夜中の町に消えていった。スコットネス教授に到着を知らせる電話を入れてから十五分ほどで、教授の車が駅前に停まった。駅舎を出ていくと、車から降りてきたスコットネス教授は大きく腕を広げてわたしを抱きしめてくれた。教授のひげが頬に当たって痛かった。

オールバニーのすぐ南、デルマーという町にあるスコットネス教授の家に着いて、先週泊めてもらっていたのと同じリビングルームの続き間に入ると、テレサ・ミード教授がガウン姿でテレビを見ていた。テレビは延々と事件の特集を流しているらしかった。再びお邪魔させてもらうことへのお礼を言うと、テレサは、

「うちは全然構わないわよ。何日でもいただけないさいな」

と言ってくれた。そして、

「こういう形でうちも大事件に関わるんだと思うと、エキサイティングよ」

とつけ加えた。

夫妻が部屋を出ていった後、ベッドにかけられたキルト・カバーの下にもぐり込んで目を閉じると、間もなく眠りに就いたようだった。興奮して目が冴えるということもなく、疲れ切って眠りに引き込まれるというのでもなく、普段のように眠ったのだった。夢はかけらも見なかった。

明けて九月十二日の朝、

「ニューヨーク・タイムズは売り切れだったよ、まだ早い時間なのに」

スコットネス教授はそう言って地元の新聞をキッチンテーブルの上に置いた。一面には、二機目の飛行機が突っ込んで火を噴いた瞬間の世界貿易センタービルのカラー写真が大きく載っていた。

「新聞の記事によると、ジョージ・ブッシュがなかなか姿を現さなかったのは、ホワイトハウスが襲われるという情報があつたためなんだと……」

「あらま！作り話じゃないの！」

テレサは言った。夫妻は左翼を自認しており、現政権には批判的なのだった。

スコットネス教授が耳に入れてきた話によると、昨日はニューヨークで宿を確保できなかった人々が大勢オールバニーへ流れてきたのだという。

「空きのあるホテルは、一番近くてオールバニーだったというわけさ」と教授は言った。

この日はテレサの勤めるユニオン・カレッジへ同伴することになった。オールバニーの中心部から二十キロほど北西に離れたスケネクタデイの町にある大学だ。九月八日にニューヨークへ移動する前に滞在した時は、スコットネス教授の勤めるラッセル・セージ・カレッジについていった。こちらはオールバニーの約十キロ北東、トロイという町にある。

オールバニーはニューヨーク州の州都で、州政府の建物群が威容を誇っている一方、トロイやスケネクタデイを含む一帯の町々は緩やかな坂を永遠に転がり落ちて行くような不況の中を生きている。十九世紀から二十世紀の初めにかけては紡績産業で栄えた土地だけれども、東部の多くの古い工業都市と同様、産業構造が変化してからはずっと経済的には貧しいのだとスコットネス教授が教えてくれた。

ユニオン・カレッジのテレサの研究室に着くと、ドアに何かの引用の張り紙がしてあって、世界の富の七〇パーセントはわずか数百人の人間に握られており、そのほとんどはアメリカ人だ、と書いてあった。

テレサが用事をしている間に、電話を借りて航空会社の予約センターにかけた。手元には九月十一日の、ニューヨーク発シカゴ行き航空券があつた。オールバニー発シカゴ行きに振り替えるのですがと電話に出た男性の予約係に言うと、木曜の便へ振り替える手続きを取ってくれた。予約係氏はこちらが戸惑うほど快活で愛想よく、振り替えはあつけないほど簡単に済んだ。

「フライト予定は変わる可能性がありますから、インターネットなどでチェックして下さい」

と注意を受けて、電話を切った。

ユニオン・カレッジで、テレサは同僚の先生たちやスタッフに出会おうとわたしを紹介して、

「昨日、ニューヨークにいて、ビルが崩壊するのを見ていたんですって」  
と言った。誰もがもつと詳しい話を聞きたがった。質問に一生懸命答えているうちに、わたしはしゃべるのがとてもつらいことに気がついた。自然に口をきくことができず、まるで舌の根に重りがついているようだった。一言一言を努力しなければ発することができないのだ。たとえれば、普通の道を歩くときはほとんど意識もせずに両足を動かしているのに、足にからみつくぬかるみを歩かねばならずに一足一足、力を込めて抜き差ししている、そんな感覚だった。体の疲れは感じなかったし、格別難しい質問をされているわけでもなかったのだ。

前日に続いてこの日もよく晴れて、空は遠くまで澄み渡り、ニュー・イングランドの豊かに起伏する緑が、夏の終わりの日差しを浴びて静かにわたしたちの周りに広がっていた。気持ちの良いそよ風が時折吹いていた。その平穏さと、起こったこと、起こりつつあることとの落差に目まいがしそうだった。キャンパスの明るい芝の上で、大学の人たちは映画の感想を訊くかのようにわたしに質問し、そしてわたしは突然自分の喉が声を出すのを拒否していることに戸惑い、立ち往生していたのである。

テレサと家に戻ると、スコットネス教授が、娘さんのクレアを学校に迎えに行って帰ってきた。スコットネス教授とテレサの間には二人の子どもがいる。この秋に大学に入学生たダレンと、同じく中学校（七年生）に上がったばかりのクレアで、来日してすぐに一度会う機会があった。一年ぶりに今回の旅行で会った時、ダレンは大学のある町へ行く直前で、ニューヨークから戻ってきた時はもういなかった。

くるくるした金髪のクレアはわたしを見ると、

「なぜエイコがまたいるの？」

と目を丸くした。

「ニューヨークの事件でシカゴ行き飛行機が飛ばなくなったから、ゆうべ戻ってきたんだよ。でも、明日の飛行機が取れたからそれで帰るんだよ」

スコットネス教授が言うと、クレアは長い手足を落ち着かなく動かした。

「お父さん、エイコの飛行機も落ちるの？」

「Oh my god！」

わたしが思わず口を覆うと、

「いや、クレア。エイコの飛行機は落ちないよ。そんなことは考えるんじゃないよ」

スコットネス教授の声には断固とした響きがあった。クレアが自分の部屋に行ってから、

「学校でもテレビニュースを見ているし、ショックを受けているんだな」と教授はつぶやいた。

家族共有のノートパソコンがインターネットにつないであるから使いなさいとスコットネス教授が言ってくれた。居間の隅のデスクに座ってメールをチェックすると、北海道の友人夫婦が心配しているメールが入っていた。たまたま旅行の日程を知らせてあったのだ。

一本目のメールは事件直後のもので、「明日までにお返事が来なければ東京のご家族に連絡を入れてみます」とあり、二本目は「東京のご両親から無事と聞きました。良かった」とあった。改めて無事を知らせる返事を書いた。シカゴにいる友人のアンジェラは、事件当日にホテルに電話を入れてくれたという。昼にチェックアウトしたというので無事なこととはわかったと結んであった。また、趣味のサークルのメーリングリスト宛てに、サークルの先輩からのメールが入っていた。わたしは知らなかったが、秋からニューヨークに語学留学する予定だったのだという。事件が起こったのは、彼女が乗ったニューヨーク行きの飛行機がまさに太平洋上を飛んでいる時のことだった。「飛行機はアラスカに降りました。ずっとホテルのテレビを見えています。こんなに必死に英語のリスニングをするのは生まれて初めてです。命がかかっていますから…」とメールにはあった。そしてニューヨークの橋川さんからのメール。「お母さんからうちに連絡があったので、オールバニーに向かった由お伝えしました」とあった。

夜、東京の家に電話を入れた。

「健竜さんと話をしたんだってね」

と言うと、母は、そうなのよ、と微妙に戸惑う口調になった。

「健竜くんがね——『ぼくらが、対岸からあのビルを見た、最後の人間になったわけです』と言うのよ」

事件前夜、ブルックリン側からニューヨークのスカイラインを見た時の印象が、彼の記憶にも焼きついているらしかった。

「ずいぶん老成した子なのね」

と母はげげんそうにつけ加えた。

九月十三日、木曜日の朝に航空会社のウェブサイトを見ると、昨晚の段階では飛ぶことになっていたオールバニー発シカゴ行きの便は、すべてキャンセルになっていた。

「キャンセルですって——」

みじめ顔を作ってしまうと、空港へ送ってくれる用意をしていたスコットネス教授は大笑いした。

「すみません。もう一晚お願いします」

「もつといたって構わないさ」

「シカゴ大学はやめて、うちの大学院に編入しちやいなさいよ」

テレサが軽口を叩くと、教授はそれはいいと言って一層笑った。テレサは、

「ねえ、あなたは今回の経験を文章に書くべきね。絶対に書くべきだわ」

と言った。

わたしはすぐに金曜以降の飛行機の便を調べ、予約を取り直した。だが、キャンセルが繰り返されるかも知れないという予感があった。もし自分が決定を下す立場だったなら、テロが起きてから一週間は有無を言わず離着陸を禁止するだろう。

この日の残りは、もっぱら状況把握に費やした。新聞の関連記事を片っ端から読み、さらにインターネット上の情報を読む。メールでは引き続き、知人たちの動向が行き交っていた。アラスカに留め置かれた先輩は移動できるようになり次第、カリフォルニアの知人のところで日本に帰れる飛行機を待つことにしたという。シカゴにいるはずのわたしがニューヨークで事件に遭遇したというメールを昨日流したので、それに対する驚きのメールも何通も届いていた。アメリカと日本のどのウェブサイトを開いても、事件に触れていないものはなかった。アジア諸国では、この事件を起こしたのは日本人だという説がまことしやかに流れていることが、現地駐在員の日本人が書き込みをするウェブサイトに報じられていた。

金曜日の朝、三回目のフライト再予約もキャンセルされたことが、航空会社のウェブサイトにからわかった。キャンセルの文字が並ぶフライトのリストを見ながら、わたしは飛行機でもアムトラックでもない、第三の交通手段について考え始めていた。

「エイコ、シカゴに帰る手段だが、グレイハウンドを考えてみたらどうかね」

と言いながら、スコットネス教授が居間に入ってきた。

「わたしも今、そのことを考えていたんです」

「想像するほど乗り心地は悪くないと思うよ。オールバニーに駐車場があって、夕方に発車する便があるはずだ」

調べてみると、夕方の六時発のバスがあり、アムトラックとは異なり予約はいらないと

ということがわかった。このバスに乗ることを決め、その日は帰宅準備にあてることにした。教授たちが職場に行っている間に近所の食品店に行き、りんごと菓子、水を買った。以前の旅行でアムトラックに乗った時に、エアコンのせいで寒くて眠れなかったことを思い出し、アウトレット衣料店でフリースジャケットを買った。

グレイハウンドのバスターミナルには、スコットネス教授とクレアが送ってきてくれた。ステーションは混雑していた。シカゴまで百十五ドルのチケットを買い、ふたりにお礼と別れを告げて、乗車時間を待つ客の列に加わった。

わたしたちのバスの運転手は三十歳前後に見える金髪の男性で、痩せているのに骨太で顔も手も大きく、アンディという名だと自己紹介した。二時間ごとに停車時間を取り、シカゴ到着は翌朝の九時（中部標準時）という。バスは満員だった。わたしの隣には白人の、五十代に見えるどっしりした女性が座った。バスが走り出すと、どちらからともなく話が始まった。隣の女性は事件が起こった時、メイン州で休暇を楽しんでいたのだという。

「あの朝は、海岸で散歩をしていたのです」と女性と言った。

「同じ宿に泊まっていた人がやって来ましてね、『ニュースを見ましたか?』と訊くので、見ていないと言ったら、事件のことを教えてくれたんですよ」

飛行機が飛ばなくなったのでグレイハウンドに乗ることにしたんです、とわたしが話すと、女性は、自分もそうだと聞いた。

「わたしは運転ができませんのでね」

周りから聞こえてくる会話を耳を傾けていると、このバスの乗客のほとんど全員が、同じように飛行機が使えなくなってバスを選んだことが知れた。見渡したところ、大半は女性客で、中年以上の女性が目立った。バスはシカゴで利用している路線バスに比べるとはるかにきれいで、シートの座り心地も良かった。それでもこれは古い車種なのだそうで、運転手はすぐ後ろの女性客のほめ言葉に応じて、

「このバスは八〇年代後半のモデルですね。最近のモデルはもっと乗り心地がいいんですが、そういうのはみんなニューヨーク市発に回されてしまったんですよ」

と話していた。

バスはまずシラキュースで停車した。一休みしに外へ出ていた乗客がみな席につき、発車しようという時、顔を真っ赤にして湯気が立たんばかりの男が乗降口に現れた。顔全体に深く食い込んで固定されたかのような怒り皺で、寺の門の両側に据えられている仁王像

そっくりになっていた。男がわめいた。

「おれは五時間も待ってるんだ」

アンディは運転席からまっすぐ男を見据えると、

「満席です」

と感情を交えない声で言った。

「五時間だぞ！」

「すみませんが、先着順ですから」

アンディは眉一つ動かさなかった。

ロチェスター、バッファロー、エリーと、ニューヨーク州北部からペンシルヴェニア州を経て、バスはオハイオ州に入った。バスはずっと快調に走り続け、揺れも少なく、車内もアムトラックのように寒いということもなかった。けれども、停車ごとに外に出て足を伸ばしていても、次第に膝が痛むようになってきた。

真夜中にクリーヴランドに着くと、大きなショッピングモールが道路の向こうにそびえているのが見えた。街灯が周辺をこうこうと照らし出していた。

「まあ、ショッピングモールよ」

「いいわねえ。あそこに入ってゆっくりしたいわねえ」

周囲の女性たちがざわめき、ため息をついた。

バスは走り続ける。二時間ごとに停車するたびに車内の明かりが点灯するので、うとうとする以上に眠ることはできなかった。何より膝の痛みがひどくなり、外で足を伸ばしてもバスが走り出すと十分もしないうちにまた痛みが始まるのだった。

朝の五時半、薄明前の空の下でインディアナ州の停車場に入り、ここで朝食ストップということになった。マクドナルドが営業していた。黙々と食事をする運転手のアンディを離れた席から見ながら、パンケーキと紅茶の朝食をとった。

再びバスに乗り込み、明けてきた朝の光の中に広がる景色を窓から眺めると、平坦な土地にまばらに植わった木々が枝を広げる、まったくの中西部の景色に変わっていた。

朝の八時半。薄曇りの空の下に、二本の尖塔を屋上に突き立てた、見慣れたビルの姿が現れた。

「シアーズ・タワーだわ」

「ほんとだね」

通路を隔てた隣の席で、若い男女がささやいていた。シアーズ・タワー。世界貿易セン

タワービルよりも高く、近年まで世界一高いビルだったシアーズ・タワーを目にすればいつも、——シカゴに戻ってきた！——という感慨にうたれるものだが、この時は予想したほど気分は高揚しなかった。ぐんぐん近づいてくるその黒々とした姿を、わたしは安堵ともつかない起伏のない心持ちで見つめていた。

バスは時間きっかりにシカゴのターミナルに到着した。ターミナルは「ループ」と呼ばれるダウンタウン地区の西側にある。荷物を背負い、歩いてループ地区に入ると、土曜日の朝のダウンタウンは人通りも少なく、静かだった。「ボーダーズ」書店に入り、雑誌の棚を見渡して、『ニューズウィーク』『タイム』誌を買った。どちらも表紙は炎上する世界貿易センタービルの写真だった。それからランドルフ駅に行き、シカゴ大学のあるハイド・パーク地区方面へ向かうメトラ（シカゴ近郊の通勤列車）を待った。

夕刻、わたしのシカゴでの家であるインターナショナル・ハウス（留学生とアメリカ人学生が半々の大学院生専用寮）の食堂に夕食の準備のために下りていくと、台湾人のマギーに出会った。モデルのように背の高い色白の美人で、六月に修士号を取って就職した後、寮が気に入って住み続けているのだった。わたしを見ると、

「あら、エイユ、しばらく見なかったじゃないの」

と声をかけてきた。

「マギー、今日ニューヨーク旅行から戻ったところなのよ」

グレイハウンドで帰るはめになった顛末をかいつまんで話すと、マギーの大きな両目にはみるみる涙がたまった。

「よく帰ってきたわね。抱きしめてあげる」

彼女は長い腕をぎゅっとわたしの肩に回した。そして真剣な顔でわたしと目を合わせ、「あのね、不謹慎とは思うけど、言わせてもらおうわ。わたしたちは安全よ。シカゴはニューヨークほど重要じゃないわ。ハイド・パークもそんなに重要じゃない。ここは大丈夫よ」

と言った。

続く一週間あまりを、わたしは同時多発テロ事件（と日本のマスメディアは名づけた）について知ることに費やした。他のことをしようにも、頭の中が事件のことで占められてしまっって、自分の研究のことも何一つ考えられなかった。毎日寮の図書室に下りて、シカ

ゴ・トリビューンやニューヨーク・タイムズを読み、大学のコンピューター室でインターネット上の情報を検索し、書店でめぼしい雑誌を買って読んだ。そして日に何度となく、世界貿易センターのノース・タワーが崩れ落ちる光景が眼前によみがえるのだった。

シカゴ大学の新学期は九月も末にならなければ始まらないため、キャンパスにはようやく学生たちが戻って来始めたところだった。大学の創設者の名前を冠したロックフェラー・チャペルの中にはキャンドルとそれを立てる砂箱が用意され、自由に入ってキャンドルを捧げられるようになっていた。キリスト教徒ではないのだけれど、わたしもある午後、に細いキャンドルの一本を手に取り、火をともした。事件から数日を経ても、ぽつぽつと訪れる人はあった。砂にキャンドルを立てると、日本で線香をあげたときと感覚が重なった。

インターナショナル・ハウスの食堂にある大きなスクリーン・テレビは、普段は寮生たちがコメディードラマや映画やアニメ「シン普森ズ」を見るのに使っていたが、事件後はいつ見てもチャンネルをCNNに合わせてあった。ニュース番組はワイドショー的センチメンタリズムと愛国主義と、「報復」に的を絞り込んでいた。

旅行から戻って二、三日して、友人のグレイスから電話があった。グレイスは十七歳の時に家族とフィリピンから移住してきて、今は米国の市民権を申請中だった。シカゴ大学で修士号を取った後、有名なコンサルティング会社に就職し、顧客のいるオハイオ州コロンバスと、所属支店のあるシカゴを往復する日々を送っている。彼女と、わたしを心配してニューヨークのホテルまで電話をくれた韓国出身のアンジェラとは、三人でたびたび一緒に食事に出かける仲だった。

「コロンバス支店の同僚のアメリカ人たちはねえ、みんな報復攻撃はして当たり前っていう態度なのよ」

グレイスの声は悲痛だった。

「でも他の道もあるんじゃないかってわたしが言いかけたら、そんなものあるかって、もう、ものすごい剣幕なのよ。信じられない。自分たちだけが被害者みたいな言い方して……。アメリカだって、ヒロシマに原爆を落としたりしているのに……」

わたしは何と応えればいいのかわからなかった。

ただわかったのは、彼女とわたしがある違和感を確かに共有しているということだった。

日米のマスメディアの報道を見、日本人留学生たちと事件について言葉を交わすうちに、

わたしは自分がとてつもない少数者の側に立たされているという思いに苛まれつつあった。目にする報道はすべてアメリカの視点か、アメリカの外（日本）の視点かのどちらかによるもので、アメリカにいる日本人の他の学生たちの言葉にも、これは自分たちにとっては外国の事件だ、という距離感がはっきりと表れていた。わたしの感覚はアメリカとアメリカの外のどちらにも寄り添うことができなかった。

子ども時代と二度にわたる留学を合わせれば、七年を超える月日を過ごしたアメリカは、すでによその国ではなかった。日本の中でも移動を繰り返して育ったわたしにとっては、アメリカも日本で住んだいくつもの街と同様に、心の故郷の一つなのだ。かといって、アメリカ人のようにアメリカのことを考えるところでもなかった。通過してきた土地はアメリカも日本もすべて、愛着の対象であると同時に、外から観察する対象でもあった。

グレイスもわたしも、生まれながらのアメリカ人から見れば外国人以外の何者でもないだろう。それを裏付けるように、わたしたちは多くのアメリカ人とは違った目でアメリカを見ていた。その一方で、アメリカを外国として突き放すことはできなかった。アメリカはわたしたちの中に深く根を下ろし、もはや抜き得ないものになっているからだ。そのことがこれほど身にしみて感じられたことはなかった。そんなわたしの目には、事件がアメリカに住む者にもたらした痛みにも、日本のマスメディアも留学生たちも無頓着に映った。ひるがえってアメリカでの事件の扱いの多くは、アメリカの国境の外側には痛みを感じる者が存在しないかのようなだった。その間隙に落ちた思いをすくい取る言葉は、あまりにも少なかった。

わたしはテレサの言葉を思い出していた。何か書くべきよ、と彼女は言った。しかし、わたしは何を書けば良いのだろう。あの、「グラウンド・ゼロ」と呼ばれるようになったビル崩壊の現場近くには、もつとずっと大変な体験、生きるか死ぬかといった目に遭った人たちがたくさんいたはずで、彼らに比べればわたしの体験などは生ぬるいというほどにも値しないものだろう。では何か評論めいたものを書くのか。アメリカを批判する言説はすでに大量に日本語メディアの世界に巡回しているし、そのようなものを書くには今の自分の心はアメリカの人々に寄り添い過ぎていた。そして、テロを非難してアメリカに同情する言葉を書くには、あまりにアメリカを知り過ぎてしまっていた。

シカゴに戻って数日後、旅行中に撮った写真が出来上がってきた。写真の紙封筒を開けて中身を見た時、思わず手が止まった。最初の写真に、曇り空の下にそびえる世界貿易セ

ンターのツイン・タワーの姿が大写しになっていた。日付は九月十日。マンハッタンからエリス島に渡るフェリーの年から撮ったものだった。他にも何枚もの写真にツイン・タワーが写し込まれていた。それが何の建物なのか、意識もせずに撮っていたのに違いない。そして十一日に撮った二枚の写真。ガラス越しとはわからないほどくっきりと、煙を上げるノース・タワー、そして崩壊後に残った白煙が、澄んだ空を背景に写っていた。二枚目の空に、あの日は気づかなかったヘリコプターが小さく舞っていた。

九月二十日の朝、毎日の習慣でナショナル・パブリック・ラジオをつけたあと、ベッドの中でぐずぐずしていると、世界貿易センターのノース・タワーの百七階にあった、Windows on the Worldというレストランの話題が始まった。スタッフ四百五十人のうち七十六人が行方不明で、残った人たちの連絡所がニューヨーク市内ミッドタウンの労働組合本部に設けられ、そこでスタッフにインタビューをするというものだった。エジプト出身という給仕長が話していた。

「失ったものはどんなに言葉を尽くしても伝えきれません……わたしたちは、小さな国連 (a little United Nations) だったのです」

さらに、それぞれバングラデシュとウルグアイの出身というふたりの給仕長が、スタッフの出身国を数え上げた。

「バングラデシュ、イエメン、モロッコ、エジプト、パキスタン、インド、ウルグアイ、ネパール、インドネシア、アルゼンチン、ブラジル、コスタリカ、ペルー、エクアドル……」

「金融ブローカーもいないし、億万長者もいない……」

「わたしたちがニューヨーク・シティを代表していたんです。働く人間である、わたしたちが」

聞くうちに、ふいに泣けてきた。涙はとめどなく頬を伝い、枕にしみ込んでいった。

事件の日から数えて十日目、初めて流した涙だった。

九月の末にアンジェラから電話があった。この頃にはすでに、ブッシュ政権が、テロの首謀者が潜んでいるとされるアフガニスタンへの空爆に踏み切るのは秒読みと思われる情勢になっていた。アンジェラはシカゴ大学のロースクールを卒業して、この秋からワシントンDCの法律事務所働くことになっており、引っ越し準備で忙しい中、時間を見つけ

てはグレイスやわたしと会っていた。父親の転勤について世界各地を渡り歩いて育ったアンジェラは、高校からはずっとアメリカで一人暮らしで、母国語よりも英語の方が得意になっていた。両親とはコミュニケーションが取れないのよ、両親は複雑な英語はわからないし、わたしは韓国語では複雑なことが言えないからね、と彼女は言うのだった。

「オブラ・ウインフリーのショウの件だけどね、テーマがテロ事件なんだから」

アンジェラは電話で言った。

「それでもいいよね？　しょうがない、行くでしょう？」

アンジェラは本当は演劇関係の仕事に就きたかったのだけど、それではワーキング・ビザを取るのが難しいので、アメリカで生活が続けるために法律の道を選んだのだという。演劇を始めテレビドラマや映画、いわゆるセレブリティの情報に詳しく、そういう方面にうといわたしにとっては貴重な情報源だった。今度も、アメリカでは知らぬ者のない有名生番組であるオブラ・ウインフリー・ショウの観覧チケットがふたり分当たったから、一緒に行こうとわたしを誘ってくれていたのだった。ただし、直前にならないとその日の放送のテーマはわからないということだった。そして、十月一日分のテーマは、「戦争だけが答えなのか？（IS WAR THE ONLY ANSWER?）」——つまり、九月十一日のテロに対して武力報復をすべきか、否か——に決まったと連絡してきたのだ。

朝九時から始まるショウに間に合わせるべく、十月一日は朝早くふたりでハイド・パークを出て、ダウンタウンから収録場所のスタジオヘタクシーを飛ばした。秋風が吹き始めっており、アンジェラは黒いレザージャケットを羽織っていた。

スタジオの席を埋めた観客は、九割以上が女性だった。観客も番組中にしゃべる時間が与えられている。放送の始まる前に、金髪を短いボブスタイルに整え、黒の細身のパンツスーツに身を包んだ女性プロデューサーが、観客への諸注意に加えて、

「今回のテーマでは戦争への賛成側と反対側、両方の意見をバランスよく取り上げたいので、ぜひ積極的に発言してくださいね」

と言った。続いてオブラ・ウインフリーが、完璧にセットした髪にグレーのスカートスーツ、ハイヒールという姿でスタジオに登場した。四十代の黒人女性で、読書クラブのための本の選定からフィットネスのアドバイスまでこなし、アメリカ中のテレビ視聴者に知れ渡っているスター司会者である。観客の数人と彼女が雑談を交わし、本番が始まった。

「戦争をしようとしているアメリカで、わたしたちは本当はどう感じているのでしょうか……今日はさまざまな意見を聞き、包み隠さず話し合いたいと思います」

アンジェラがささやいた。

「意外とビジネス・ウーマン風だわ。もっとあつたかい包容力のある感じかと思っていたけど」

太った黒人の女性が手を挙げて言った。

「わたしは敬虔な人間です。普段なら、暴力には絶対反対です。でも、今回のことは、これは別だと感じるんです、暴力はいけない、でも、これだけは別、いけないけど、別で……」

「なぜ別なんですか？別にするものがあるのなら、それは信念とはいえないんじゃないですか？」

とオブラは長くなりそうだったその発言を遮って言った。

金髪のショートヘアの女性が手を挙げた。アイシャドウとマスカラのつけ過ぎで目の周りはタヌキのように真っ黒で、ピンクのトレーナーにはハイヒールや口紅やハンドバッグなど、いわゆる女の小物があちこちにアップリケされていた。

「うちは父も主人も軍人なんです。父は第二次世界大戦に、夫はベトナム戦争に出征しまして。国のために戦争を支えるのは愛国心のある人間なら当たり前のことじゃありませんか」

多くの観客がうなずき、ぱらぱらと拍手さえ起こった。

三十代に見える白人の男性が立ち上がった。

「アメリカ人は他国のことを知らな過ぎると批判されますが、外国事情を扱おうとしないマスメディアにも問題があるんじゃないですか」

「それは」

オブラは男性を見て、

「外国事情を放送すると、視聴率が落ちるからなんです。本当に、てきめんの下がるんですよ」

と言った。

テレビ局の側ではいろいろな映像素材を用意しており、ジェシー・ジャクソン師への電話インタビューを始めとして、戦争の決断には疑問を投げかける内容のものが多かった。観客からもひとりふたり慎重な意見の人が出たけれども、大半は開戦するのは当然、むしろ積極的に推すという意見だった。

わたしは自分が今に外国人だということが見つかって槍玉に挙げられるような心地がし

て、身を固くしていた。透明になってしまいたい気分だった。隣の席で、アンジェラも微動だにできなかった。

オプラは（あるいは番組制作側は）戦争には賛成はしないという姿勢を打ち出す予定にしていたらしかった。最後は「戦争の現実」と称し、過去の戦争——第二次世界大戦から朝鮮戦争、ベトナム戦争など——の痛ましいニュース映像をたくさん見せて締めくくった。スタジオには涙する人たちも見られたけれども、おそらくはオプラ側の予想を超えて、開戦支持派が多かったのは間違いなかった。バランスよく意見を紹介しながら最後は戦争反対のメッセージへという制作意図は達成されず、圧倒的にアフガニスタンとの戦争を求める観客に対して番組側が抵抗を続けるといったぎくしゃくした図式になってしまった。

それぞれの昼間の用事を終えて、アンジェラとわたしは夕方に再び大学キャンパス内で落ち合い、夕食を共にした。わたしたちの話題はテレビスタジオを埋めた女性たちの、あまりにも好戦的な雰囲気集中した。アンジェラは本気で腹を立てていた。

「『やっちゃえ！ やっちゃえ！』って勝手に盛り上がってるバカとかいたじゃん。見なかった？ おまけにあの変なピンクのトレーナーの女よ。何が、（裏声を作って）『うちは一、父も一、主人も一、出征しまして一』なのよ。知ったこっちゃないっての」

「アンジェラ、声が大きい」

わたしははらはらして周りをうかがった。

「構わないわよ、この辺はシカゴ大の人間ばかりだもん」

アンジェラはいらいらとコーヒーをかき回していたが、やがて落ち着きを取り戻した口調で言った。

「でも、ある意味では、行って良かったと思うわ。オプラのショウに来ている人たちは、普通のアメリカ人の代表だからね。わたしたち、ハイド・パークにいる限りは、大学の私たちの意見しか耳にしないでしよう。それが世間一般とはかけ離れたものなんだからわかっただけでも、収穫だったわ」

「そうね。わたしも、そう思うわ」

それはその通りには違いなかった。でもだからこそ、心は沈んだ。ここにいてはいけないのだろうかという思いが初めて忍び寄ってきたのは、その時だった。

十月四日から、インターナショナル・ハウスでは同時多発テロ事件について考える連続

講演会が開かれた。初回到顔をしてみると、高校の体育館ほどの大きさの集会ホールに用意された席がぎっしり埋まり、立ち見も出ていた。この日のテーマは「九月十一日の事件の地域的・世界的文脈」というもので、シカゴ大学の歴史学部から二人、政治学部から一人が講演者として来ていた。講演者のひとり、アメリカと中東との関係史が専門という歴史学部の助教授は頭にターバンを巻いた姿で演台に立ち、「今回のテロのような行動を容認するわけではありませんが」と幾度も留保をつけながら、アフガニスタンのタリバン政権を、かつてのレーガン政権が育てた面があることを解説した。そんな留保をわざわざ口に出して言わなくてはならないものなのかとわたしは思った。それほどまでに、この中東出身らしい研究者が日々感じていた重圧は大きいものだったのだ。

三人の講演が終わった後、質問者用のマイクの前には長い列ができた。講演会には、何はともあれ状況を正しく知ろうとする意欲と熱意が満ちていた。大学コミュニティは知性に拠って立つ共同体らしい仕方、事件の衝撃に立ち向かっていた。アフガニスタンへの空爆が始まったのは、その三日後のことだった。

\*\*\*\*\*

食事を終えてレストランを出る頃、ルイスは、職場のシカゴ・トリビューン社にわたしを案内してくれると言った。わたしたちは徒歩で目と鼻の先のトリビューン・タワーへ向かった。わたしは釈然としない思いをルイスにぶつけることができないままに彼の背を見ていた。ルイスはこれからもあの日の事件については語らないつもりなのだろうか。ただ一編、広島に原爆を投下して今は老いたパイロットが、「テロリストに空爆など無駄なことだ」と語った記事があった。あの言葉に、ルイスは無言で同意していたのだろうか。

一九二〇年代に建てられたトリビューン・タワーは装飾性をきわめたゴシック様式の外観で、シカゴの有名な建築物の一つでもある。「報道」を語る古今の格言が壁に彫り込まれた玄関ホールを通って中に入ると、オフィス・スペースは思いがけないほど静かだった。デスクが並ぶ広い中央フロアには若い職員たちが数人コンピューターに向かっており、その周りを囲む形で個人オフィスが配置されていた。何とはなしに抱いていた、煙草の煙とキーボードを叩く音に席卷される戦場のようなイメージとはまったくかけ離れた場所だった。

壁の半分がガラスで内外が見えるようになってきている個人オフィスのスペースへ、彼はわ

たしを招き入れた。

「この本に参加したんだよ」

彼が手にしていたのは、九月十一日の事件をテーマにした大型本の一冊だった。

「ああ、こういう本は今たくさん出ていますね」

「その中ではこれがいちばん出来がいいよ」

ルイスは自分の文章が載ったページを開いて見せた。短いエッセイだった。目を走らせると、最後の一行に、

Amber waves of grain……

とあった。わたしは微笑した。

「この歌、好きですよ」

エッセイには、空の下に広がる一面の麦畑の写真が添えられてあった。彼も微笑して、本を閉じた。

彼はこうして行くのだな、とわたしは思った。中西部の風土について、人について、長年書き続けてきたルイスだった。彼はアメリカの対外政策について解説をしたり、テロリズムの原因について分析をしたりはしない。ジャーナリストであれば、何かそのようなものを書きそうなものだと考えていたのだけれど、ルイスが自分の守備範囲と決めたのは、中西部の大地について語ること——この、近代の力技で平原に出現させられた都市にあって、「美しきアメリカ」の歌詞を人々に思い起こさせることなのだ。わたしは知っていたのだ。

O beautiful for spacious skies,  
For amber waves of grain,  
For purple mountain majesties  
Above the fruited plain!

美しき国よ、広やかな空のもと、

麦の穂は琥珀色に波うち、

山は紫にそびえ立つ、

実り豊かな平原に。

それはわたしには切なくも懐かしい歌だった。あのシアトル郊外での子ども時代、英語もあまりわからずクラスメートの中にも入って行けなかった頃から、折にふれて学校で歌われたその歌の風景に自分が立つことを許されているのかは知らなくとも、染み入るようなその旋律は胸の奥にずっと留まり、日本に帰国しても消えることがなかった。

新聞社の建物を出ると、夜更けのミシガン大通りには人も車も少なくなっていた。ルイスと向かい合って立ち、別れの言葉と握手を交わした。歩き出してふと振り返ると、ルイスは北へ向かうタクシーを呼び止めたところだった。車に乗り込む彼のトレンチコートの裾が、夜風に吹かれてひるがえった。しんと冷えた石とコンクリートの街並を、二月のシカゴの空が黒々と押し包んでいた。わたしはきびすを返して、乾いた風の転がる道を、南行きの列車が出る駅へ向かって歩いていった。

あの日の事件とその後の世界について、語られるべきことはあまりにも多く、どんな語り手でもそのすべてを論じることにはできない。そうであれば、自分の語るべきこと、自分がかもつとも良く語り得ることを知ることから、始めるよりほかにない。

わたしは高い土手の上を歩いているようなものだ。その高さと幅の狭さを恐れ、両側の草原や川辺に腰を下ろして語り続けている人々を、心のどこかで羨ましいと思いつつながら。けれども、土手を降りた時にわたしはわたくしでなくなるのかも知れない。

そろそろと足を運び、ときおり立ち止まっては空を見上げ——そして向こうから歩いてくる人との出会いを待っている。そしていつか、彼女や彼と交わした言葉が、ふと空の青を見上げた土手の両側にいる誰かの耳にも届く時を待っている。

(了)